

群青

仙台市立第一中学校

第2学年だより

第9号 2023.6.27



多くの感動を残し、本年度の市中総体が無事終了しました。保護者の皆様の深いご理解と手厚いご協力をいただきましたこと、深く感謝申し上げます。総体が終わり、早くも2週間が経ちました。その後、中間考査、合唱コンクールへの取り組み…と、学校の様子は日々めまぐるしく移り変わっています。部活動も代替わりが進み、2年生がリーダーとして活躍する部もいくつかあります。最後の中総体まで、残り1年。日々の活動を充実させ、しっかり地力を蓄えてほしいと思います。時間が過ぎましたが、市中総体を終えての感想文を掲載させていただきます。ご一読ください。

1組 S, K (合唱部)

中総体3日目。私たちは宮城広瀬球場で行われた野球部の決勝戦の応援に行った。相手は大沢中だった。試合が始まった。吹奏楽部の演奏と、学芸部・保護者の皆さんが一体となった応援はすごく迫力があつた。「これが中総体か」と思った。試合は、大沢中が先制、見ている側の私が緊張した。しかし、一中也負けてはいなかった。最初は声あまり大きくなかった応援も、次第に頑張り始めた。「一中頑張れー」と友達と言った。野球部だけではなく一中生全員が戦っていると私は思った。

結果は1-3で負けてしまったが、一中生はとてまかっよく感動した。中学生になって初めての一般応援、「中総体」というドラマを見た。その日の天気は曇りだったが、私の心は晴れていた。

2組 K, F (バドミントン部)

僕は、バドミントン部の応援に行きました。その中総体で、二人の先輩の涙を見ました。それはそれぞれ異なる理由でした。

一人は、負けて泣いていました。長い間泣いていました。そして、周りの人たちに慰めてもらっていました。その時、僕はいい部に入ったと思いました。

もう一人は、仲間が勝ったのを喜んで泣いていました。うれしくて泣いていました。周りの人たちもすごく喜んでいました。勝つて本当にうれしいんだろうと思いました。

先輩たちが泣くほど本気になる中総体。僕は自分が出場したいと思い、やる気がわいてきました。

3組 S, M (ソフトボール部)

「プレイボール！」センターまで届いた審判さんの声を聞き、気持ちがきゅっと引き締まった。

中総体初日対錦ヶ丘中。ソフトボールをやった良かったと思えるゲームだった。最初は相手に押され、一中はなかなか流れをつかめずにいた。出塁してもその後の攻撃が続かず、相手の好プレイにも阻まれ、流れは完全に相手のものだった。そして、5点のビハインドで迎えた最終回の攻撃、2点を奪うも2アウト。そこから、1、2番バッターが出塁し、私に回ってきた。去年の新人戦の打席を思い出した…セカンドゴロだった。そんな情けない結果にしたいくないと打席に向かった。「大丈夫!」「いける!」そんな応援が私の緊張をほぐしてくれ、ピッチャーのボールがよく見えた。そしてフォアボールを選び出塁。私がホームを踏めば追いつくことができる。私に続く4番の先輩も冷静に押し出しのフォアボールを選んだ、2点差。次のバッターは、5番の先輩。打った!私は全力で3塁ベースを蹴りホームを踏んだ。あの瞬間のみんなの輝いた笑顔は忘れられない。結果、試合をタイブレーク(特別延長)に持ち込み、後攻めの一中は、逆転サヨナラ勝ちを収めた。あきらめないこと、応援の力、ソフトボールの楽しさ…ソフトボールの醍醐味をこの1試合で先輩からすべて教わったような気がした。ソフトボール部は2日間で4戦し、2勝2敗で県大会に進むことはできまかった。先輩たちと一緒にもっとプレイがしたかった。でも、下を向いている暇はない。高2の先輩方が行った県大会、そこがどんな場所なのか、来年は自分たちの目で確かめてみせる。

4組 T, Y (ソフトテニス部)

僕が気づいたのは「応援の大切さ」だ。団体戦の1回戦の応援をしていた。最初の試合、相手も相当の力があり、結果はどっちに傾いてもおかしくない状況だった。心配になったが、みんなで力を合わせて応援し、それに呼応するように先輩のスマッシュが炸裂した。この時、戦っているのは選手だけじゃないんだと思いました。

2日目の個人戦、選手全員が全力で戦っている中、その選手一人一人を全力で応援したが、何ペアも敗退してしまった。中には泣いている人もいた。僕は、応援の力が足りなかったのではないかと思った。前日の思いがありながら、この中総体をどこかで甘く考えていたのではないかと反省した。そんな大事な思いを持ち続け、来年度の総体に向け力を付けていきたい。

5組 R, I (卓球部)

私は、初めて中総体に出ました。個人戦、団体戦のどちらにも出るようになったので、練習に追われる日々が続きました。結果から言うと、個人戦は2回戦で敗退、団体戦は予選敗退で決勝トーナメントに進むことはできませんでした。先輩たちと決勝トーナメントに進めなかったことが一番後悔したことです。

また、個人戦で先輩が3位になりかっこいいと思いました。そして、自分もあんな風になりたいと思いました。前まで、先輩は卓球スクールに行ってるから上手いんだ、だから私はあんな風にはなれないと思っていました。でも、総体に出てみて、先輩のように順位がつくくらい強くはなれないかもしれないけど、少しでも多く努力して、強くなって、来年中総体では個人戦も団体戦も悔いが残らない結果が残せるように頑張りたいと思えるようになりました。今までみんなから遅れをとっていた分を取り戻せるように、毎日の取り組みを見直していきたいと思います。

6組 K, T (美術部)

6月12日の朝、学芸部である私は、決勝に進んだ女子バスケットボール部の応援に向かうバスに乗っていた。ルールすら知らない私は、正直頑張っしてほしいという気持ちはそれほど芽生えてはいなかった。応援席に座りしばらく待つと、男子バスケットボール部の人たちが応援のやり方を教えてくれた。

そして試合が始まった。点差は離れ不利な状況が続いても、応援を繰り返すうちに私は自分の気持ちの高ぶりを感じていた。結果は負けであった。試合後もずっと不思議に思ったのは、最後まで応援をやめなかったことだ。大きな点差があったにもかかわらず、タイムアップまで選手は諦めず、応援の声は大きくなる一方であった。私は、その日からスポーツのルールを知ろうと思うようになった。

7組 K, S (陸上競技部)

今回僕は出場しなかったのですが、全力で選手を応援した。事前にかける声や応援の言葉をみんなで決め練習した。その時、自分は大きな声で精一杯声を出しているつもりだったが、先生から「声が小さい」と指摘された。だが、自分は限界まで出しているから、みんなもっと出せよと他人まかせの気持ちでいた。案の定、本番でも声は小さいままだった。みんなの声が小さく、自分だけが大きな声で応援することがだんだん恥ずかしくなってきた。しかし、一人で大声を出している小野寺君や絵里奈先生の大きな声を聞いて、自分も大きな声で応援しようという気持ちが湧いてきた。そして、準決勝や決勝まで残った選手がいると、「記録を出してほしい」という気持ちが生まれ、喉がかわるくらい応援した。

最終日の朝、現時点での総合得点が寺岡中学校と並んで第1位の位置にいることを知った。ミーティングの時、「みんなの応援の出来が、得点を左右する」と吉野先生に言われ、今自分にできることを全力でしようと思心に決めた。最後の低学年リレー決勝などは、応援の自分も緊張し「いけ！いけ！」と念じた。

今回の大会は、自分は直接的にチームに貢献してはいないが、選手が100%の力が出せるよう尽くすことはできたと思う。この気持ちを忘れず練習に励み、来年は自分が競技場のピッチに立ちたいと思う。

先人の言葉

「本気の取り組みの後に、本当の課題が見える」

小野 仁 (第2学年主任)

